

優秀賞『君たちはどう生きるか』

永岡 あいか

本書の主人公は 15 歳の少年、あだ名はコペル君である。コペル君は、2 年前に父を亡くし母とばあやと女中 1 人の 4 人で生活をしている。コペル君は成績が良く、物事を哲学的に捉え、考えることができる優秀な少年である。同時にいたずら好きで無邪気な一面ももつ。コペル君には仲の良い 3 人の友人がいる。小学校からの同級生で優美な水谷君。自分の考えを曲げない勇ましい北見君。貧乏だが心の強い浦川君だ。この物語は、この仲の良い 3 人との間で起こる問題や、学校での事件など、日常生活での小さな出来事からコペル君がどう考え、成長していくかの過程を描いた作品になっている。そして、もう 1 人重要なのは、コペル君に寄り添う叔父さんの存在だ。コペル君とのやり取りの中で書かれている叔父さんノートは、読者にも語りかけてくる。

デパートの屋上で、コペル君は「人間て、まあ、水の分子みたいなものだねえ」という発見をする。このコペルニクス風の考えが、コペル君と呼ばれるようになった理由である。ある日、コペル君はニュートンの林檎の話から、粉ミルクが自分の口へ入るまでの道のりを考え、見ず知らずの他人との間に、切ることでできない網目状の関係が成り立っていることに気付き、叔父さんに手紙で打ち明ける。叔父さんは感心し、この発見がすでに「生産関係」として広く知られていること、「疑問をどこまでも追っていった、精神を失ってはいけない」こと、「互いに好意を尽くし、それを喜びとしていることが本当の人間関係である」ことを伝える。

叔父さんや友人との関わりの中で、コペル君の心は大きく成長していく。そんな中、学校で事件が起こる。上級生に服従しない北見君とそれに目を付けた上級生との間で争いが起きたのだ。しかし以前に、「殴られるならいっしょに」という「固い約束」をしていたのに、コペル君はその約束を破ってしまう。コペル君は、友人を裏切ってしまった自分に苦しむことになるが、ついに叔父さんに全てを話す。叔父さんはコペル君に対して、すべき事を助言し、コペル君は素直な思いを手紙にし、この問題を解決させていく。

コペル君は、この事件や叔父さんとのやり取りの中で、「人間としてのあるべき姿」を見

つけていく。叔父さんの語りかけによって、「生きる」とはどういうことかを見つめ直し、考えることを促す一冊になっている。

全十章から成り、作者自身の知識や考えを読者に直接問いかけてくる。本書はコペル君と叔父さんのノートによって構成される。本書の一番の見所は叔父さんのノートでもある。コペル君が感じ、考えたことを、叔父さんのノートがさらに掘り下げ、広めていく。

物語を読み進めるにつれて、面白いと感じたのは、第4章の「貧しき友」の場面である。友人の1人である浦川君の家を訪ねたことで気付いた、人間としての価値。ただ消費するだけで何も生産していない自分と、すでに世の中に、「もの」を生み出している浦川君の立場の違いから、人間というものの価値を考えさせられる。叔父さんのノートには、消費する人間と生産する人間、どちらが立派であるかが明確に説かれ、これからの生き方を教え、導いている。表面上で判断し、比較してしまっている現代のあり方に対し、人間の本当にあるべき姿を教えてくれる。本当に大切なことは、広い範囲でなく自分の身近な社会にしっかり目を向け、感じ取ることではないだろうか。続いて、面白いと感じた場面は、本書のクライマックスでもある。第6章の「雪の日の出来事」、そして第7章の「石段の思い出」でのコペル君の心の変化である。固い約束をしたのに、大切な友人達を裏切ってしまったコペル君。しかし、その一度のあやまちから、コペル君は「人間として肝心なこと」を学んでいく。この場面は、お母さんの存在が大きく関わってくる。一度あやまちを犯してしまったからこそ、知ることができる特別なこと。コペル君と同じ立場に立った時、自分ならどうしただろうか、あなたならどうするだろうか。叔父さんのノートに、「僕たちは、自分で自分を決定する力をもっている。だから誤りを犯すこともある。」という言葉があるが、誤りから何を得ることができるか、それが大切であると思う。失敗の中に意味を見つけ、自分を成長させる、当たり前のことかもしれないが、改めて失敗することの大切さに気付かされるはずだ。

本書の最後には、こう生きろとは書かれておらず、「君たちは、どう生きるか。」という問い掛けで終わる。生き方は人それぞれであるが、聞かれると難しい問いである。この物語を読むことで、自分がどうあるべきか、それが分かるかもしれない。もしかしたら、自

分の生き方を見つけるヒントが隠されているかもしれない。あなたは、どう生きますか。